

早産児における予定日のウロテンシンⅡ濃度は 子宮内発育と関係している

江畑晶夫、中野有也、清水武、藤井隆成、水野克己
昭和大学医学部小児科学講座

【背景・目的】

ウロテンシンⅡ（U-Ⅱ）は強い血管収縮作用を有し、成人においては高血圧や動脈硬化でその血中濃度が上昇することが知られている。子宮内発育不全は将来の高血圧のリスク因子のひとつであるが、その背景にあるメカニズムは十分わかっておらず、生後早期の U-Ⅱ レベルに関してはほとんど調べられていない。本研究の目的は、pilot study として早産低出生体重児における血清 U-Ⅱ レベルを評価し、それに影響を与える周産期因子を検討することである。

【対象・方法】

在胎 34 週未満で出生した早産低出生体重児 57 名（男児 26 名、女児 31 名）を対象として、予定日周囲に血清 U-Ⅱ レベルを評価した。周産期因子がそれを与える影響を統計学的に解析した。

【結果】

対象となった 57 名の在胎週数は 32.1 ± 2.7 週、出生体重は 1589 ± 503 g、出生体重 SD スコアは -0.7 ± 0.1 であり、評価時（予定日）の修正週数は 39.3 ± 1.1 歳、体重は 2718 ± 355 g、体重 SD スコアは -0.8 ± 1.0 だった。SGA 児は AGA 児と比較して、予定日周囲の血清 U-Ⅱ レベルが有意に高値だった ($p = 0.019$)。単相関分析では、血清 U-Ⅱ は評価時修正週数と有意な正の相関を示し、出生体重、出生体重および身長 SD スコア、評価時体重および身長 SD スコアとそれぞれ有意な正の相関を示した。交絡因子を除外するために行ったステップワイズ法による重回帰分析の結果では、出生体重 SD スコアのみが有意な説明変数となった ($\beta = -0.395$, $p = 0.002$)。

【考察・結論】

早産低出生体重児では出生体重 SD スコアが予定日周囲の血清 U-Ⅱ レベルと負の相関をもつことが示された。この血清レベルが実際の血圧上昇に寄与しているのか、将来継承されていくかどうかは不明であるが、将来の血圧上昇リスクと関係している可能性も考えられ、今後の検討すべき課題である。

(794 文字)